

「人生フルーツ」上映 & 「エンディングノート」講演

今後の人生を考えるきっかけに...



人生フルーツ *Life is Family*

第91回 キネマ旬報・ベスト・テン文化映画第1位

第32回 高崎映画祭 ホリゾン特賞

平成29年度 文化庁映画賞 文化記録映画優秀賞

## エンディングノート 講演

大事なことは、自分で学んで決めておく  
～残された人の役に立つために～

延命治療のこと、判断能力が低下したときのこと、遺言書のこと、葬儀・お墓のことなど、元気な時に自分で学んで決めておきたい大事なことがあります。

講師：山口浩次（大津市社会福祉協議会次長）



エンディングノートをプレゼントします

2019年 **3月9日(土)**

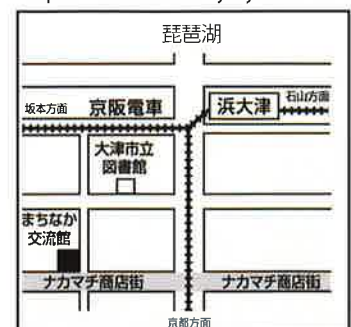
① 10:00～12:00 (うち 11:30～12:00 講演)

② 14:00～16:00 (うち 15:30～16:00 講演)

- ・会場：まちなか交流館ゆうゆうかん
- ・定員：各回 40名 (先着順) ・入場料：500円
- ・お申し込みはゆうゆうかん(TEL: 077-525-6674)まで
- ・主催：人生フルーツを上映する会 in 大津

(水曜休館)

まちなか交流館ゆうゆうかん  
大津市長等2丁目9-1  
<http://www.otsu-yuyukan.net/>



ナカマチ商店街のアーケード内、  
京津線の線路より西に約100m 北側  
・京阪浜大津駅から徒歩5分・JR大津駅から徒歩15分  
専用の駐車場はありません。

人生フルーツを上映する会 in 大津 (まちなか交流館ゆうゆうかん、大津市社会福祉協議会)



第91回 キネマ旬報ベスト・テン  
文化映画第1位

第32回  
高崎映画祭  
ホリゾン特賞

平成29年度  
文化庁映画賞  
文化記録映画優秀賞

# フルーツ人生

*Life is Fruity*

人生は、  
だんだん美しくなる。

日時：2019年3月9日(土)  
①10:00～ ②14:00～

会場：まちなか交流館 ゆうゆうかん

※ 要申込 電話 077-525-6674

撮影：山岡映彦 提供：主婦と生活社

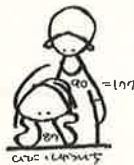
ナレーション 樹木希林

プロデューサー：阿武野勝彦 音楽：村井秀清 音楽プロデューサー：岡田こずえ 撮影：村田敦崇 音声：伊藤紀明 オーサリング：山口幹生 TK：須田麻記子  
音響効果：久保田吉根 編集：奥田繁 協力：日本映画専門チャンネル 監督：伏原健之 製作・配給：東海テレビ放送 配給協力：東風  
2016年/91分/HD/16:9/日本/ドキュメンタリー ©東海テレビ放送

津端修一さん90歳、英子さん87歳 風と雑木林と建築家夫婦の物語 [life-is-fruity.com](http://life-is-fruity.com)







## ふたりのこと

### 修一さん

1925年1月3日生まれ。東京大学を卒業後、建築設計事務所を経て、日本住宅公団へ。数々の都市計画を手がける。広島大学教授などを歴任し、自由時間評論家として活動。

### 英子さん

1928年1月18日生まれ。愛知県半田市の老舗の造り酒屋で育つ。27歳で修一さんと結婚し、娘2人を育てる。畑、料理、編み物、機織りなど、手間ひまかけた手仕事が大好き。

## ふたりの本

キラリとおしゃれ

キラリと、おしゃれ  
〜キッチンガーデンのある暮らし〜

津端英子  
津端修一 著

(ミネルヴァ書房, 2007)



あしたも、こはるびより。

つばた英子  
つばたしゅういち 著  
(主婦と生活社, 2011)



ききがたり  
ときをためる暮らし  
つばた英子  
つばたしゅういち 著  
(自然食通信社, 2012)



ひでこさんのたからもの。  
つばた英子  
つばたしゅういち 著  
(主婦と生活社, 2015)



ふたりからひとり  
〜ときをためる暮らしそれから〜  
つばた英子  
つばたしゅういち 著  
(自然食通信社, 2016)

最新刊

2017年  
11月17日  
刊行

きのう、きょう、あした。  
つばた英子  
つばたしゅういち 著  
(主婦と生活社)



風が吹けば、  
枯葉が落ちる。  
枯葉が落ちれば、  
土が肥える。  
土が肥えれば、  
果実が実る。  
こつこつ、ゆっくり。  
人生、フルーツ。



## むかし、ある建築家が言いました。 家は、暮らしの宝石箱でなくてはいけない。

愛知県春日井市の高蔵寺ニュータウンの一隅。雑木林に囲まれた一軒の平屋。それは建築家の津端修一さんが、師であるアントニン・レーモンドの自邸に倣って建てた家。四季折々、キッチンガーデンを彩る70種の野菜と50種の果実が、妻・英子さんの手で美味しいごちそうにかわります。刺繍や編み物から機織りまで、なんでもこなす英子さん。ふたりは、たがいの名を「さん付け」で呼び合います。長年連れ添った夫婦の暮らしは、細やかな気遣いと工夫に満ちていました。そう、「家は、暮らしの宝石箱でなくてはいけない」とは、モダニズムの巨匠ル・コルビュジエの言葉です。



かつて日本住宅公団のエースだった修一さんは、阿佐ヶ谷住宅や多摩平団地などの都市計画に携わってきました。1960年代、風の通り道になる雑木林を残し、自然との共生を目指したニュータウンを計画。けれど、経済優先の時代はそれを許さず、完成したのは理想とはほど遠い無機質な大規模団地。修一さんは、それまでの仕事から距離を置き、自ら手がけたニュータウンに土地を買い、家を見て、雑木林を育てはじめました。あれから50年、ふたりは、コツコツ、ていねいに、時をたためてきました。そして、90歳になった修一さんに新たな仕事の依頼がやってきます。

本作は東海テレビドキュメンタリー劇場第10弾。ナレーションをつとめるのは女優・樹木希林。ふたりの来し方と暮らしから、この国がある時代に諦めてしまった本当の豊かさへの深い思索の旅が、ゆっくりとはじまります。